第3回宗像市小中一貫教育推進協議会 会議録

日　時	平成25年10月7日(月)午後6時00分から午後8時00分まで
場　所	宗像市役所北館1階 103B 会議室
出席者	【委員】 石丸哲史、前田誠、中村淑恵、船越美知、脇田哲郎、井ノ口真一、 水田尚文、中村藤恵、武内勉、木村秀子 ※欠席委員・・・池田隆 【事務局】 教育部理事 後藤正弘、教育部長 髙橋勇次、 教育政策課長 岡田光晴、教育政策課指導主事 羽田野崇、 教育政策課指導主事 西島潔、教育政策課指導主事 正路澄代、 教育政策課政策係長 許斐知加 （敬称略）

1 開会挨拶　会長挨拶

2 日程説明　事務局 岡田教育政策課長（資料1）

3 前回の会議録の確認　承認（資料2）

・2ページ6行目の「想像力」を「創造力」に修正してほしい。

・7ページ10行目の「1、2年生から教科担任制も」を「前期から一部教科担任制を」に修正してほしい。

→修正後の会議録内容で承認

4 協議　今後の小中一貫教育「基本方針案」について（資料3）

○基本方針案の内容説明　事務局 西島指導主事、羽田野指導主事

・本日は、前回の提示案に対して、皆さんから出された意見を反映させたものを基に協議を進める。もう一度全体を見ていただき、ご意見をいただきたい。

・16ページ 「ア めざす学校像」の3～4行目は、「プロデュース・コーディネート・コミュニケーションの3つの力を有し、協働的意識・当事者意識・使命感を高めようとしている。」という記述にした方が分かりやすいのではないか。また、「イ めざす家庭像」の3行目の「強化期間の設置等、取り組んでいる。」を「強化期間の設定等に取り組んでいる。」に修正すべきではないか。

→修正する。

・18ページ8行目以降に書いてある学園長連絡会とは、本協議会のように市民代表や学識経験者がメンバーとして加わっているイメージなのか。

→そのような形ではなく、基本的には、市教育委員会と学園長にお集まりいただきたいと考えている。

・22ページ(7)アの記述について、小中一貫教育を校区で進めるのであれば、学校運営評議員の他でもいいのではないか。

・学園長連絡会と宗像市学校教育研究協議会のすみわけはどうなるのか。

→現在、それぞれの中学校区でとても良い取組みがなされている。学園長連絡会は、それらを全市的に広げるような場にしたいと考えている。

・いくつかの会議を設置するのであれば、協議する内容をきちんとすみわけしていただきたい。また、それぞれの会議が連携できるような体制づくりを行っていただきたい。

・学園長連絡会を校長研修会とは別に組織して何をするのか。具体的なイメージがつかめない。

→中学校区の特色ある取組みを出し合って、徐々にではなく、一気に全市に広げることにつなげたいと考えている。

→小中一貫教育に焦点を絞って、各中学校区で取り組んでいる内容について話し合っていただきたい。

・学園長の責任と権限が明確になっていない形での連絡会だから、よく見えないところがあるのではないか。学園長の考えがどのように波及していくのかが全然見えない。校長の充て職は非常に多いので、スリム化していただき、校長がもっと学校に居られるようにしていただきたい。連絡会を組織するのであれば、明確な位置づけをしてほしい。

・学校の取組みは、校長が決めて主体的に行うべき。基本的には、校長がすべての責任を持って学校を運営しているのだから、いろいろな取組みを加味してうまく運営していただきたい。機関はたくさんない方がよい。

・校区によって小中一貫教育に対する温度差を感じるので、全中学校が集まって情報交換する場は必要だと思う。

・市域全体で小中一貫教育をすれば、校区によって取組内容や効果にさまざまなバリエーションが出てくるのは当然で、良い意味でのそれぞれの個性を共有する機会はあってしかるべき。校区の温度差をできるだけ縮小し、良い取組みや課題を共有していく役割として連絡会を位置づけると良いのでは。これを機に、学校教育研究協議会や校長会などの組織のすみわけも積極的に進めていただき、実際の運用をご検討いただきたい。すみわけについてより必要性を認識したということでよろしいか。文章の表現については修正をお願いする。

・8年前に小中一貫教育を導入した際は、どちらかというと教育委員会が指導性を発揮しながら関わっていき、2番目、3番目の指定校区になると、校区や学校の主体性を教育委員会がサポートしていくという関わりになっていったと思う。今回基本理念の中で、一層推進していくとあるが、推進の仕方、各学校区の主体性を重んじつつ、かつ、市の施策としての小中一貫教育のさらなる充実という、バランスの問題をどのように考えているか聞かせていただきたい。

→取りかかりの部分は教育委員会のアプローチがあったと思う。今はそれぞれの中学校区が地域、子どもや家庭の実情に応じて、個々の良さを発揮しながら小中一貫教育が進んでいると考える。外部からは宗像市の小中一貫教育は非常に理想的だという言葉をいただく。トップダウンで進んで、その結果、形だけ入り、中身が伴っていない自治体もあると聞く。市としては、今後、基本的には中学校区の主体的な取組みをバックアップし、中学校区それぞれの特色を生かした小中一貫教育に取り組んでいただきたい。

・18ページ4行目に「○○学園」等の愛称を設けるとなっているが、中学校区の主体にまかせて自由という取扱いにすると広がらないと思う。

→愛称はぜひお願いしたい。子どもにとって言葉があるというのが意識をそちらに向けるという意味で重要。最初は違和感があるかもしれないが、年を経るにつれて、子どもも教職員もそのような意識を持ち始めたと聞いている。

・名札などを作るとよいかもしれない。財政的な支援があればよい。

・三鷹市のように、小中一貫教育とコミュニティスクールの両方を実現させている自治体もある。三鷹市は東京のベットタウンで、ほぼ地域が同じような人口密度。宗像市のように人口の疎密がない。そういう意味ではそれぞれの地域に学園とつけていいような中学校区ができあがっているし、コミュニティも形成されており、そのような背景があってうまく成り立っているといえるのではないか。宗像市でも、中学校区の持つ地域性や主体性を視野に入れていかなければならない。教育委員会だけで達成できるものではないので、課題として認識していきたい。

・研究校の役割がみえない。推進校と研究校がほとんど同じことを行い、その中で研究校が発表するということであれば、研究校という呼び方が本当にふさわしいのか疑問である。研究するのであれば、その中身が必要だが、中身に匹敵するような項目が見当たらない。17ページの「3　小中一貫教育推進校及び小中一貫教育第Ⅱ期研究校における教育活動」の説明に、この役割がどういうものであるかを少し付け加えたらどうか。

→第Ⅰ期が終わっているので、これまでの取組みをさらに充実していただき、成果を発表いただくということになる。すでに取組みが充実しているので、あまり変化がないように見えるのはご指摘のとおりなので、推進校の在り方については再度詳しく確認したい。

・地域にはいろいろな特性がある。コミュニティ運営協議会では、事務局長会議や、会長会と事務局長会議の合同会議などを開いて、自分のところが行っている事業の自慢大会をやろうということで、時々話し合いをしている。地域によって温度差はあるが、子どもたちに対する思いは皆さん同じだと思う。自分としても、いろいろ学校とのつながりを持ちながら、地域として何ができるのか、何をすればいいのかを考えながら、今後ともしっかり取組みを進めていきたいと考えている。

・「めざす家庭像」には、保護者の願いに基づくという言葉があるが、学校から示された方向に保護者が乗っかっている部分が多いのではないかと思う。学校が地域のことを考えてやってくれていることに安易に乗っかっていることが自己反省点である。学校が保護者に対してもっとこうしてほしいという点を具体的に示してくれれば、保護者も地域も学校の意に添えるし、最終的には子どもたちのためになるのではないかと思う。

・「めざす家庭像」で文章化されているのをみると、保護者は中学校区や学校の取組みの方向性を意識していないと思うので、学校は、保護者に対してもっと方向性を示すべきだと思う。小中一貫教育とコミュニティスクールの良いところを取り入れて取り組めたらよいのではないか。

・コミュニティという中学校区単位でのさまざまな取組みや努力は必要。16ページの「めざす家庭像」「めざす地域像」も、すでにコミュニティスクールを実施されているところにあるヒント、言い回しを参考にして、具体的な文言も含めて盛り込むことができれば、家庭像の定義がよりわかりやすくなり、保護者のどなたがみても、家庭のあるべき姿が理解できるのではないかと思う。「めざす家庭像」「めざす地域像」が貧弱な部分もあるので、充実できるのであれば少し増やしていただきたい。たとえば家庭像を見ると、保護者が独自にというか、連携の部分のニュアンスが薄いと思う。方針としてはこれで良いので、学校像、家庭像、地域像の3つを読めばそれぞれが連携していることがニュアンスとして受け取れるような文章の書き方を検討していただきたい。

・小中学校の先生方が行き来すれば、新しい風が入る。学園の先生としてひとまとまりになり、血が通う。システムを作り、時間割にはめこまなければ、現実的には実感しないと思う。費用が発生するかもしれないが、具体的なシステムを入れて実際に動かさなければ変わらないし、学園の名前なんか不要だという議論になってくるのだと思う。日々の実践が大切。

・14ページの成果指標についてA案とB案のどちらでいくかを協議したい。ご意見をいただいてから方向性を決めたいと思う。

・この評価であれば、いずれも単独校でも出る。小中一貫教育の中でも、その評価であるのなら、小中学校が一貫したことによってという枕詞がいるのではないか。縛りがいるかもしれないと思う。

・学校が楽しいという評価の方が、地域色が低いと思う。自分に良いところがあると思いますかというのは、一見学校が中心に受け取れるが、家庭地域の関連も非常にあると思う。地域や家庭など、いろいろなところで総合的に取り組まないと自尊感情はあがってこないと思うので、B 案が良いのではないか。別の指標を立ててもよいと思う。小中一貫教育を進めたから関わる力が育ってきたという違う見方もできるのではないかと思う。

・関わりという評価をする上では、いろいろな関わりや交流がある。そのような整理をしたうえでの総体として学校生活が楽しいというのは分かりやすいと思う。

・小中の関わりが縦で、地域との関わりが横だとすると、縦横両方、中学校区の主体性一体性という点が横だとすると、教育課程として縦が一貫しているという、そういう意味での小中の関わり、そして地域の要素が関わるという点で、A 案をもう少し、小、中単独ではなく、小中という意味で、若干わかりやすくするという方向性はいかがか。

・何もせずに楽しいですかと聞くのではなく、こういう活動を導き出してもらわないと、それまでいかないということだと思う。

・教育課程が重要になってきて、実際にそれを行ううえで、小学校は小学校なりにそれぞれの教科が専門化した感じで縦に割るのではなく、総合的な学習にあるとおり、やはり発達段階に応じて一人の先生がすべての教科をみるということが小学校の低学年、中学年では必要だと思う。その一方で高学年になると、中学校とのつながりがあるので、専門性を生かしたものが大事になる。いずれにしても、一般的な議論というのは実際に小中一貫した教育課程をどう進めていくかで改変できるものであろうし、臨機応変に変わるものではないかと考える。まずは今言ったような話で進めるということで、発言した委員の意見がまとまってくるのではないか。

・子どもたちにとって、どう映っているのか。〇〇学園もあったが、そのことによって子どもたちのアイデンティティが確かに生まれてきているような現状にあるのか。アイデンティティを生むような持っていき方であれば、大変効果があるが、それによって負担が生まれて先生方に賛否両論あるような現状であれば、子どもたちには映るものがいろいろ変わってくるのではないかと思う。

・そのような意味では、評価の部分も慎重につめていかなければならないと思う。

5 閉会挨拶　会長挨拶

6 諸連絡　事務局 岡田教育政策課長より。第4回協議会の日時・場所については後日通知する